

巻頭言

命を守る防災学を

テヘラン大学アジャнкт教授

高 田 至 郎

東北地震では、死者・不明者が2万人にも及んだ。1人1人の非情な死が2万ケースにも及んだ現実に思いを馳せるとき、その悲しみは一層募るばかりである。神戸地震でも、17年後には多くの人々の懸命の復興努力によって見事に町並みは蘇った。しかし、6,434名の死者の復興は永久にない。逆に、残されたものの悲しみは年とともに増大するばかりである。地震工学・防災に携わる我々は、命を失わない防災学を懸命に模索しなければならない。自然の災害は人間の英知や学問知見の隙間を突いて襲ってくる。残念ながら、地震に襲われるたびに多くの新たな教訓を得るのが現状である。そのためにも、施設・構造、そして経済活動に多少支障が生じて、まずは命を守る地震工学・防災学を目指すべきである。構造物が守れたとしても、そのことによって人命が失われるような事態が生じると本末転倒である。“これほど大きな地震だから、多少の死者が出ては仕方ない、これぐらいの死者数でよかった、発展途上国なら数十万人の死者の地震もある”という話を東北地震後、何回か聞いた。死者を“数”としてみればそうかも知れない。しかし、我々は1人の死者も出さない防災学の確立を目指すしなければならない。人的被害の研究分野では長年、多くの研究がなされてきた。しかし、大災害では常に多くの死者が発生する。災害で死に至る時間プロセスと場面そして社会の仕組み、一人の人間のおかれた条件・心理などが死者発生 の 要 因 である。工学分野だけでは災害死者ゼロを目指すことは不可能である。社会科学との綿密な連携が要求される。

数年前に、パール・バック(1892~1973)の“Big Wave(大津波)”の小説を偶然に読む機会があった。言うまでもなく、パール・バックは中国の農民の生活を描いた“大地”で著名なノーベル賞受賞女流作家である。彼女は、雲仙普賢岳の災害に遭遇した経験から、当時の日本人の災害観や死生観を捕らえて、災害後どう生きるべきかを少年の生き方から小説化したといわれている。

猟師で海岸付近に住んでいる少年と、高台に住む庄屋家庭の少年とは無二の友人であった。大津波の襲来で猟師家庭の少年は父親を失い、高台の友人宅に引き取られる。さら

に、立派な屋敷の長老に大事に育てられる。しかし、悲しみに打ちひしがれる少年に、“ジャ（獵師の子供の名前）が生きとる限りジャの父ちゃんたちもジャの命の中に行き続けるのじゃ。津波はもう行ってしもうた。また、太陽が照り、鳥が歌い、花が咲く。ほれ海を見てみろ”と諭すが、悲しみは増すばかりである。成長したジャは海に向かって大きな窓を開けた家を建てて、元の海岸の地に戻っていく。そして、“津波がやってきても備えができています。おれ、海に立ち向かって生きる”と父親と過ごした心が躍った生活の再建を目指す。合理的に物事を考える西洋人にとって神秘的な日本人の考え方を紹介したと思われるが、パール・バックは、日本の海外に開かれた窓を新しい日本夜明けと捕らえたのかも知れない。何度も災害を受けながら、自然をありのままに捕らえて自然とともに生きる日本人の考え方が根強いことも復興に当たって配慮しなければならない。

突然の災害で近親者を失う悲しみは想像に絶する。しかし、我々は受け入れなければならない。受け入れ方は年齢や従来让生活、性格、家族・友人などの要因で多くのパターンがあるが、災害心理学では、ショックとともに直後に心が折れて立ち上がれない、しばらくは対応に頑張るが、その後落ち着くと落ち込みが続く、しばらくの後に目標に向かい勇敢に立ち上がる、災害直後には多少心の動揺があるが気丈に頑張りを続ける、という分類があるらしい（G. Bonanno）。神戸の地震は施設・建物が壊れた地震であった。しかし、東北地震では施設被害は勿論のこと、日本人の価値観が変化し・心が壊れそうになった地震でもあった。

防災教育・訓練の重要性が改めて強調されているが全く同感である。被災を避ける防災教育とともに、万一被災した後の長期にわたるケアについて物心ともに防災教育も強調されなければならない。蔵の財は復興が可能であるが、身体の財は高齢とともに衰えはあるが、その安全は何より重要である。身体の死、あるいは長期にわたる心の苦しみは生涯つづく。しかし、生き残った者の身に宿る心・生命力が折れなければ、時間はかかるかも知れないが、皆が力をあわせれば復興はできる。命は宝である。復興に立ち向かう蔵・身・心の財を大切にしながら、命を守る防災学、被災者に寄り添う総合救命防災学の確立を目指す。

以上